

魯迅「狂人日記」における文体と比喩表現

劉 靚

Abstract

There has been a tremendous amount of research on Luxun's "A Madman's Diary", the first vernacular novel of modern Chinese literature, and most of the research has been done about the theme of this novel. But the literary style is very important to understand this novel and the author.

In 1917, there was a movement for promoting colloquial literature in China, called "5.4 literary revolution". Hushi was the leader of this movement and wanted to use the classical colloquial Chinese used in old novels to replace the classical literature. Luxun showed a different attitude by the style of his first colloquial novel, "A Madman's Diary".

There are two parts in this novel: the preface is written in classical Chinese and the diary is written in a unique style which is different both from modern colloquial Chinese and from classical Chinese. In the diary, some figures of speech, such as simile and metaphor are used.

In this paper, we focus on the similes, metaphors in 'A Madman's Diary,' and analyzing their role to unravel the process of cannibalism comes to reality in the madman's mind by using metaphors.

キーワード……文体 直喩 隱喩

はじめに

魯迅の「狂人日記」(1918)は、中国における最初の近代白話(口語体)小説とされている。当時、中国においては「文学革命」が進行しつつあった¹⁾。文学革命提唱の先駆けは胡適の「文学改良芻議」²⁾である。胡適はそこで白話文学を提唱し、『三國志』『水滸傳』『西遊記』等一連の白話小説を称揚し、ここで用いられている白話文を使用することを提唱した。陳独秀は胡適の「文学改良芻議」をうけ、ただちに「文学革命論」³⁾を書いて、文言文(文語体)で書かれた古典文学を打倒し、明瞭で通俗的な社会文学を建設することを唱えた。さらに、周作人は「人の文学」⁴⁾を発表し、「人道主義を根本として、人生の諸問題に対して記録研究する」ことを主

張した。このようにして、文学革命運動は知識人によって、表面的にはヨーロッパ文学を範として、中国の旧文学を批判する方向で進められた。しかしながら、このような文学革命は、魯迅にとって、「甘い夢」に見え、それに対して「あまり情熱は感じていなかった」⁵⁾。

「狂人日記」によって、魯迅は本格的に文学革命に関わり始めたが、魯迅は、文言を完全に否定する白話一辺倒の態度を持していたわけではない。「狂人日記」において、封建的礼教と家族制度を暴露した内容は、文学革命のスローガンと一致している。しかし、文体からいうと、文語とも口語ともつかぬ、魯迅独自の文体が「狂人日記」において形成されている。このような文体は、魯迅の文学革命に対する態度も反映していると考えられるが、同時に、「狂人」の複雑な内面を表現するのに有効な文体として考案されたとも思われる。

魯迅が「狂人日記」を執筆するまでには、日本留学→初期文筆活動→沈黙という段階があった。1902年から1909年の日本での留学生活において、魯迅は翻訳活動を行い、その過程でロシアや東欧作家の作品に出会った。一方、留学地である日本の文学界では自然主義文学が盛んな時期であったが、彼はむしろ夏目漱石などの作家から影響を受けた。魯迅自身は、「狂人日記」創作の準備として、「むかし読んだ百篇ばかりの外国の作品」⁶⁾とともに、「ごくわずかの医学知識」⁷⁾をあげている。1909年に帰国した魯迅は、その後まもなく1911年に辛亥革命を経験し、1913年に文言文による短編小説の処女作「懐旧」を発表以後、ほぼ5年間執筆活動を中断していた。そして1918年、「狂人日記」が誕生し、中国で「近代文学」の幕が開くことになる。

「狂人日記」はこれまで様々な角度から論じられてきたが、その比喩表現について詳細に論じたものはない。本論においては比喩表現を中心としてその文体を論じ、この小説に込められた魯迅の文章観と小説観を問い直すこととしたい。

1. 「狂人日記」の文体

「狂人日記」については、その「食人」というテーマなどをめぐって数多くの研究が行われてきた。直接魯迅に師事したこともある中国文学者増田渉は以下のように述べている。

「文学革命」の作品としては、はじめ口語詩がつくられ、胡適などの新詩が『新青年』に載せられていたが、それはすべて「試み」の域を出ないものであった。1918年5月『新青年』に魯迅の小説「狂人日記」が出て、はじめて「文学革命」は作品的実践のかがやかしい第一歩をふみ出したのである。これは表現形式としては口語体であり、思想的には儒教的家族主義の人間侵害をテーマにしたヒューマニズムに支えられていた⁸⁾。

また、文学革命の「口語文の主張は、……その実質的内容は(19)18年5月、魯迅の『「狂人」日記』の発表によって与えられた。その文体の清新さ、内容の深刻さによって、まさに中国近

代文学の出発点となった」⁹⁾と評されている。文学革命において、魯迅は白話運動の推進者である。1918 年に書いた雑文の中では、白話に反対する人を「現在の屠殺者」¹⁰⁾と述べている。魯迅の文章は、1918 年に「狂人日記」を創作し、『新青年』への執筆を始めることを境として、前期の文言文の時代と後期の白話文の時代に分けることができる¹¹⁾。川本栄三郎は「狂人日記」における言語を「現代の中国文とならねばならない」「新式白話」と定義している¹²⁾。しかし、魯迅が「狂人日記」で意図した白話は当時胡適主唱した白話とは主旨が異なる。胡適は唐宋以来の白話文学の伝統を踏まえて「白話文學之爲中國文學之正宗，又為將來文學必用之利器，可斷言也（口語文学が中国文学の正統であり、また口語が将来の文学に必ず使用すべき利器であることは、断言できることである。）」¹³⁾という観点を示した。胡適は、旧体制における中心的文章であった文言文を否定し、白話文をそれに代わる近代的な文章であるとしたのである。一方、「狂人日記」の文章は、文言文と白話文が混在している。この混用を「狂人」の内面の表現として見れば、魯迅は文学改革について、文言文か白話文かの二者択一よりも、文学作品の伝達性や人物の内面を提示することをより重要視していると考えることができる。最初、魯迅自身は「我那時對於『文學革命』，其實並沒有怎樣的熱情（私は当時文学革命に対しては実際のところ、あまり熱情を感じてはいなかった）」¹⁴⁾と述べているが、「狂人日記」が発表された後にも、積極的に『新青年』に投稿し、様々な試みをした。魯迅は自らこの小説について、以下のように述べている。

在這裏發表了創作的短篇小說的，是魯迅。從 1918 年 5 月，《「狂人」日記》、《孔乙己》、《藥》等，陸續的出現了，算是顯示了“文學革命”的實績，又因那時的認為“表現的深切和格式的格別”，頗激動了一部青年讀者的心¹⁵⁾。

（ここで創作の短編小説を發表したのは、魯迅である。1918 年 5 月から、「狂人日記」、「孔乙己」、「藥」などが、続々と現れ、「文学革命」の実績を示したし、当時、「表現の深刻と形式の特異さ」が認められたため、一部の青年読者の心をかなり激しくゆさぶった。）¹⁶⁾

また、魯迅は『呐喊』の序において、錢玄同に勧められて「狂人日記」を書いた理由を以下のように述べている。

是的，我虽然自有我的确信，然而说到希望，却是不能抹杀的，因为希望是在于将来，决不能以我之必无的证明，来折服了他之所谓可有，于是我终于答应他也做文章了，这便是最初的一篇《狂人日记》¹⁷⁾。

（そうだ、私は私なりの確信を持っているが、しかし希望となると抹殺してしまうことはできない。なぜなら希望は将来にあるものであり、絶対にないという私の証明で、彼（錢玄同）のあるという説を説き伏せることは決してできないからだ。それでついに私は、文

章を書くことを承諾した、すなわちこれが最初的一篇『「狂人」日記』となったのである。)¹⁸⁾

「狂人日記」の文体は当時の文学革命の方向性と合致していたが、それは同時に、近代小説における主人公の「内面」の表現に見合う文体として作り出された物であった。上に引用した「表現の深切と形式の特別」¹⁹⁾において、「深切」とは「思入れが深くて切実である」という意味であるが、「形式の特別」とは、文語と口語の併用あるいは、文語でも口語でもない文体を指す。竹内好はこの文体を「狂人日記」に「ふさわしい文体」²⁰⁾と評し、「「狂人」心理の表現として成功すると同時に文章改革の試みとして成功することになった」²¹⁾と述べている。

魯迅自身は文学作品の創作時の文体の選択について、以下のように述べている。「我做完之后，总要看两遍，自己觉得拗口的，就增删几个字，一定要他读得顺口，没有相宜的白话，宁可引用古语，希望总有人会懂，只有自己懂得，或连自己也不懂的生造出来的字句，是不大用的²²⁾。（書きあげたあと、二度ぐらいは読み返してみる。自分で読んで口調がととのわないと思うところは、字を削ったりふやしたりして、すらすら読めるようにする。ピッタリした口語が見つかぬ時は、いっそ古いことばを使う。きっと誰かわかってくれる人はいるはずだから。ただ、自分にしかわかぬか、または自分にさえわかぬような未熟な字句は、なるべく使わない。）」²³⁾これは、彼の小説全般についての発言であるが、自己の文体確立のための苦心が見られる。「ピッタリした口語が見つかぬ時は、いっそ古いことばを使う」という主張の中には、当時の文章改革、白話運動に対する彼自身の態度が伺える。古語を完全に否定する白話一辺倒の態度を持っていたわけではないのである。

魯迅はまた、中国の文章を改革するために、外国語に基づく表現を積極的に取り入れることの必要性をもしばしば主張している。1931年に発表した「翻訳についての通信」の中で、次のように述べている。

这样的译本，不但在输入新的内容，也在输入新的表现法。中国的文或话，法子实在太不精密了，……这语法的不精密，就在证明思路的不精密，……。要医这病，我以为只好陆续吃一点苦，装进异样的句法去，古的，外省外府的，外国，后来便可以据为己有。……远的例子，如日本，他们的文章里，欧化的语法是极平常的了，……。²⁴⁾

（このような訳本は、たんにあたらしい内容を輸入するばかりでなく、新しい表現法をも輸入している。中国の文あるいは言葉は、その法則があまりにも不精密です……この文法の不精密ということは思考方法の不精密ということを証明します。（中略）この病気を治療するためには、私は次々と苦いものを食べ、異様な句法を詰め込んでいくしかない、古いものでも、他省や他県のものでも、外国のものでも詰め込むより仕方が無いと思います。後になれば、それが自分自身のものになっています。……遠い例としては、たとえば日本ですが、彼らの文章には欧化した文法がきわめてあたりまえのものになっています……。）²⁵⁾

つまり、魯迅は、「文法の不精密」すなわち「思考方法の不精密」を正すためには、古語や方言、外国語等を積極的に文章の中に取り入れようとしているのである。

しかし、「狂人日記」の文体は、「狂人」によって書かれたものと仮構されており、「思考方法の不精密」を正すための文章というより、むしろ、「狂人」の心理を精密に表現できる文体が選ばれていると考えるべきであろう。

この作品については、物語論の角度から、数多くの研究が行われており、中見里敬、平井博、千野拓政らによる研究は、語り手が独白する、または語り手が回想をするという形に、小説が異彩を放つ理由を見だしている²⁶⁾。ここでは、比喩表現を中心に、「狂人日記」における魯迅の文体観を検討する。

1-1. 「序」: 文言文と白話について

「狂人日記」は、作品の外枠の語り手である「余」によって語られる文言文による「序」と、「狂人」の「我」によって綴られた日記を「余」が「撮録」した白話を主とした日記本文から構成されている。ここでは、「序」が文言文で書かれていることの意味を考えてみたい。

「序」には日記の由来が説明されている。「余」は友人兄弟の一人が大病に罹ったと聞き、故郷へ戻ったとき見舞に寄る。しかし、病になったのは友人の弟のほうであり、既に病から癒え、某地へ官吏の候補として赴任していったと聞かされる。友人は弟が病中に綴った日記を提示する。その日記を見ると、弟の病気はいわゆる「被害妄想狂」であつたらしい。「余」はこの日記は医学研究の目的に供することにする。

周知のように、文学革命以前の中国の小説は多く白話で書かれていたが、中国の儒者たちは小説に対して一種の侮蔑的な態度を取っていた。吉川幸次郎は、「中国小説の地位」において、過去の中国の社会に於ける小説は、「価値的な存在ではなくして、反価値的な存在であり、文化ではなくして、むしろ非文化であった」とし、清の史学者銭大昕の『潜研堂文集』からの次の文を引用している。

古より儒・釈・道の三教有り。明よりして以来は、又た一教を多^ませり。曰く小説。小説演義の書は、未だ嘗て自ら以って教えと為さざれども、而も士大夫と農工商賈と、之に習聞せざるは無く、以って兒童婦女の字を識らざる者に至るまで、亦た皆な聞いて之をまのあたりに見るが如し。是れ其の教えたる、儒・釈・道に較べて更に広き也。(中略)

釈と道とは、猶お人に勤むるに善を以ってすれど、小説は専ら人を導くに悪を以ってす。姦邪淫盜の事、儒・釈・道の斥^{あき}らかに言うに忍びざる者をば、彼は必ず相を尽くし形を窮め、津津として道^いうを楽しむ。殺人を以て好漢と為し、漁色を以て風流と為し、喪心病狂、忌憚する所無し²⁷⁾。

吉川によると、過去の中国において、倫理は必ず実在の経験の中に求められるべきものであり、小説は空想の所産であって、空想は倫理ではないことと、小説は口語で綴られているが、口語は不完全な言語であり、「特殊な節度と均斉と装飾とを持った文語のみが、完全な言語で」²⁸⁾あるという二つ原因で、「(特に士大夫階級において) 小説はすでに否定されるべき存在であった」。民国時代に入っても、上述のような白話小説を軽んじる考えは暫く続いていた。当時の知識人にとって、文言文が正統的なものであり、白話は非正統的であった。道理は文言に属すると見なされていたのである。魯迅自身もまた、「狂人日記」を書くまでは、このような文言文で評論を書き（「摩羅詩力説」等）、小説を書いていた（「懐旧」（1912））。

「狂人」日記の「序」も、このようにそれまで正統的と考えられてきた文言文で書かれているが、しかし、これまでの文言文とは性質が根本的に異なり、文言文にまつわる価値観の転倒がなされている。すなわち、新島淳良が言うように、この「序」は、当時の考証家や新聞のパロディーであった。具体的には以下の通りである。

「狂人日記」文言序について見てみると、「月日は記さざれど、墨色と字体とも一様ならざれば、その一時に成しにあらざるや必せり」というのは、当時それだけが唯一の学問であった考証学の文体のパロディであった。（中略）また、「いまこれを抄して一篇となし、医家の研究材料に供せんとす」とあるのは当時のジャーナリズムの文体のパロディである²⁹⁾。

一見、従来の文章観を踏襲しているように見える文言文で「狂人日記」を始めながら、魯迅は、それをパロディーとすることによって、これまでの白話と文言文にまつわる価値観を逆転させたのである。

1-2. 日記本文の文体

日記本文は白話、文言、方言が混じっている特殊な文章である。

1-2-1. 方言の使用

「狂人日記」において、日記の文章は「狂人」が書いた言葉とされているので、方言は「狂人」の出身地を表すであろうし、白話文と文言文が混合しているという事は、「狂人」の内面が白話的な心理と文言的な心理からなっているということを意味するであろう。「狂人」が自ら書き下ろしたとされる日記体の本文においては、中国の紹興方言（呉方言）が使用されている。曾建生が「狂人日記」に使用された言語について、詳しい分析を行っているので³⁰⁾、それを参考にしながら、「狂人日記」における方言の使用を見てゆく。

「狂人日記」においては、方言的言い回しと方言文型が用いられている。

(1) 方言的言い回し (/の前は呉方言、/の後ろは標準語である。)

①晓得/知道、停(一会)/过、不住(的點頭)/不停、(先從他)起頭/开始、(母親知道)没有/不、(母親)想(也知道)/想必、死也不肯(跨過這一步)/坚决不肯

日本語訳：知っている、間もなく、しきりに(うなずいた)、(まず兄貴)から、(おふくろはしって)たろうか、(おふくろも)たぶん(しってたろう)、死んでも(この一步をふみこえそう)しないのだ。

②名詞の後ろに「子」がつく単語。例えば、椽子/椽条、妹子/妹妹。(日本語訳：垂木、妹)

③形容詞の疊詞が多いが、標準語にはこのような用法がない。例えば、白厲厲、黒漆漆、氣憤憤。(日本語訳：白くてぴかぴか、まっ暗、ぷりぷりする。)

④助詞「着」と「了」の混用。例えば、「果然我大哥引了一個老頭子慢慢走來」という文がある、日本語に訳すと、「兄はひとりの老人を案内して、のろのろはいて来た」となる。しかし、現代中国語において、概ね、「着」は現在進行形であり、「了」は完了形である。

(2) 方言文型

①呉方言において、肯定文は「動詞+得+目的語+補語」であり、否定文は「動詞+得+不+補語」である。文中に、「豈能瞞得我過³¹⁾(おれがだませるものか)」という文があるが³²⁾、現代中国語において、「瞞得過+目的語」は「だます」という行為を「最後までやりとおす」、否定形は「瞞不過」であり、「最後までやりとおせない」という意味になる。呉方言の場合は、「瞞+得+目的語(我)+過」という構成であり、現代中国語の順番と異なり、目的語が「得」と「過」の間に入る。

②比較文について、呉方言は標準語のような「名詞 A+比+名詞 B+形容詞」という文型以外に、「比+名詞 A+形容詞+名詞 B」という文型もある。「狂人日記」には例えば、「怕比蟲子慚愧猴子，還差得狠遠狠遠³³⁾(虫が猿にくらべてはずかしいより、もっともっとはずかしいでしょうね。)」という文がある。「怕比蟲子慚愧猴子(虫が猿にくらべてはずかしいより)」は正に、呉方言の「比+名詞 A(蟲子)+形容詞(慚愧)+名詞 B(猴子)」という文型に当てはまる。この文は標準語に言いかれると、「蟲子比猴子慚愧」となる。

このように、「狂人日記」においては、呉方言の言い方と文型が存在している。上に述べたように方言の使用は、「狂人」の出身地を示す目的があると考えられるが、当時の白話化の状況も考える必要があるかもしれない。文学革命が展開され、白話を推進した際に、知識人の間にどこの地方方言が普通話の基礎とすべきかということについていまだ議論の過程の中にあり、決定されていたわけではないからである。

1-2-2. 五四時期及び当時の白話

五四運動時期及びその後の白話は、中国古来からの言語が発展した産物である。その中には、文言文からの影響もあれば、宋元明清白話も存在している。具体的には、以下の例を見てみよう。

(1)、「狂人日記」の中では、女性を指す場合、「他」が使用されている。しかし、現代中国語標準語において、人称代名詞「他」は男性に限る。五四運動以前、人称代名詞は性別の区別はなかったが、五四運動以後、書き言葉において、人称代名詞は性別の区別が現れた。つまり、「狂人日記」の「他」は、五四運動以前の使い方を採用している。

(2)「那」で疑問を表す。(現代中国語で「哪」を使用する。)

(3)「的」を以って動詞と補語を繋ぐ。(現代中国語では「地」を使用する。)

(4) 疑問の場合、「么」を使用する。(現代中国語では「吗」を使用する。)

(5) 推測の場合、文末に「罢」を使用する。(現代中国語では「吧」を使用する。)

(6) その他。例えば、何以(現代中国語では「为什么」を使用する)、叶(現代中国語では「页」を使用する)等の例がある。

1903年に、魯迅が科学知識の普及によって人々を迷信から覚醒させる目的で、ジュール・ヴェルヌの「月世界旅行」を中国語に翻訳した。魯迅は「月世界旅行」を文語体(文言)で著し、前述したような方言の言い方を用いなかった。1918年に、「狂人日記」を始めとして、魯迅は数多くの小説に方言の言い回しを使用した。そのため、「狂人日記」における方言は、単に狂人の出身地や内面を表出するだけではなく、魯迅が文学革命のために作った文体とも言えよう。

中国近代文学を生み出した「文学革命」は、文言文が白話文・口語文に変化する画期点でもあった。当時、正式の文書は「古代文言文を基礎として白話に譲歩しながら同時に西洋や日本から輸入された新語をおりこんだ文体(現代文言)が支配的であった」³⁴⁾。一方、白話文が発展し始め、文芸の領域から学術的出版物や翻訳本など種々の文書にひろまり、社会的地位を高めていった。しかし、白話文の中に、過度に欧化したもの、文言的要素のなごりの濃厚なものもあったため、白話文は十分に口語化されたとは言えなかった。

1930年3月に、魯迅らの文学者が集まって左翼作家連盟を結成した。1931年11月に、左連執行委員会で決議した「中国無産階級革命文学の任務」の第4章、「創作—題材・方法・形式」を始め、共通語(普通話)について様々な議論が展開された。魯迅は大衆語運動の中に、普通話としての大衆語の主力は北方方言であると言い、また、大衆語はそのまま放置すべきではなく、それを整理発展させようという努力と並行して、「启蒙的时候用方言，但一面又要渐渐的加入普通的语法和词汇去。(啓蒙期には方言を用いるが、それと同時にしだいに一般的語法・語彙を加えていくべきだ)」³⁵⁾という見解を示した。

一部の大衆語論者には、口語と文章語の区別を無視した口語至上主義的な傾向があったが、これに対して、魯迅は「文章一定应该比口语简洁，然而明了，有些不同，并非文章的坏处。(文章は口語にくらべ簡潔で明瞭であり、若干のちがいがあるのは文章の欠陥ではない)」³⁶⁾(答曹聚仁先生)と言って、彼らの見解を正した。同時に魯迅は方言や古語、ヨーロッパ語的要素を吸収することも主張した。できるだけ白話で分かりやすく書くとともに、精密ないわゆる欧

化文体も依然として支持されねばならないという³⁷⁾彼のこの主張は今日も認められている³⁸⁾。

2. 「狂人日記」における比喩表現

日記本文は、長さの不揃いな 13 節から構成されている。語り手「私」は、あるとき月を見て突然、周囲の視線を恐れ始め、しだいに周りの人間が自分を食べようとしているのではないかと恐れる。そして、中国の歴史上に実在する「食人」への恐怖を感じ、極度なパラノイアに陥る。最後に、狂人は自分が犠牲し、現実からの脱出の願望を、「子どもを救え」という言葉で表し、この日記が終わる。このように、「食人」は、歴史的な根拠を見出され、「狂人」の脳裡で固定観念となり、ついに狂人はパラノイアに陥ることになる。比喩表現は、この「狂人」の言説の中に現れている。以下、「狂人日記」本文に現れる比喩表現を、直喩と隠喩に分け、その本文における機能を考えてゆくことにしたい。

2-1. 直喩

2-1-1. 宛然

① 進了書房，便反扣上門，宛然是關了一隻鷄鴨³⁹⁾。

書齋へはいったら、外から鍵をかけやがった。まるで鷄かあひるでも追い込んだみたいさ⁴⁰⁾。

「宛然」は「仿佛」と同じく、「～のようである」、或いは「～のように見える」という意味である。「宛然」は旧小説や古典詩文に使用されているが、現代白話ではほとんど使われていない。例えば、明末の「初刻拍案驚奇」などの小説の中には使われている。（「閣中供養觀世音像，像照水中，毫髮皆見，宛然水月之景，就名為觀音閣⁴¹⁾。（閣中に観音像が供養されている。その像が水に投影され、細かいところまではっきりと見えた。それが宛も水に月が映る景色のようだったので、観音閣と名付けられた。）」このことは、「狂人日記」本文の文体に前代の小説の語法が紛れ込んでいることを意味する。

上に挙げた文例において、「宛然」は比喩類似を作り上げている。実際、「狂人」は自分が閉じ込められた状況が、「鷄か鴨」に類似しているという意識がある。この比喩表現において、被喩詞は直接的に現れていないが、前後の文脈によると、「私＝「狂人」」であるのがわかる。私が「鷄や鴨」のように閉じ込められたというのである。「狂人」は、陳老五（「狂人」の家の使用人と推測できる）によって家に連れられ、書齋に入ると外から鍵をかけられてしまう。書齋があり使用人がいることから、「狂人」の家は地主・読書人階級であることがわかる。その使用人によって閉じこめられたことは、「狂人」が封建家族における地位を失ったことを意味する。そして、「狂人」の自分が「家禽」のように扱われているという意識は、自分が飼育され、いつ

か食われてしまうという後の「食人」意識へと発展する萌芽的意識であり、「食人」の妄想の伏線となっている。

2-1-2. 同 ...一様

②陳老五送進飯來，一碗菜，一碗蒸魚；這魚的眼睛，白而且硬，張著嘴，同那一夥想吃人的人一様。吃了幾筷，滑溜溜的不知是魚是人，便把他兜肚連腸的吐出⁴²⁾。

陳老五が飯を運んで来た。野菜が一皿、蒸し魚が一皿。この魚の眼は白くてこちこちで、ぱっくり口をあけてるところは、あの人間を食いたがってる人間どもとおなじだ。少し箸をつけてみたが、つつるぬらぬらして、魚だか人だかわかりやしない。呑み込んだものを洗いざらい吐き出してしまった。

③你們要不改，自己也會會吃盡。即使生得多，也會給眞的人除滅了，同獵人打完狼子一様！——同蟲子一様！⁴³⁾

おまえたち、もし改心しないと、自分も食われてしまうぞ。いくらたくさん産んだって、みんなまっとうな人間にほろぼされてしまうぞ。獵師が狼を狩りつくすとおなじように——虫けらとおなじように！

「同 ...一様」（・・・と同様に）は本来比較表現であるから、原理上比較に基づいている。「狂人日記」には、「同 ...一様」は全部で9回現れるが、そのうち、以上の二例の比喩表現以外はすべて比較表現である。

現代白話文において「まるで・・・のように」という直喩は「像・・・一様」「如・・・一様」という形で喩詞となるのが普通であるが、魯迅の小説にはこの例はあまり見られない。「同 ...一様」の「同」は「像」や「如」より、「同じ」を意味する傾向が強いため、「同 ...一様」は類似性がより強い比喩表現であると言える。

上に挙げた②は魚を「人を食いたいと思っている人達」に、③は、「改心」せず人を食う人間を、獵師に狩り尽くされるであろう「狼」や、（人間に踏み潰されるであろう）「虫けら」に喩えている。「狼」や「虫けら」を喩詞とすることにより、人間の状況を説明する働きが見える。この場合、「人間」と「動物」との類似性は外見的類似ではなく、状況的類似と言えよう。

文例②において、「狂人」は蒸し魚を食っていて、「この魚の眼は白くてこちこちで、ぱっくり口をあけてるところは、あの人間を食いたがってる人間どもとおなじだ。」と思う。そして、箸をつけてはみるが、たちまち、呑み込んだものを吐き出してしまう。死んで調理された「蒸し魚」は人間に食われる境遇にあるが、それを「人を食いたいと思っている人達」に喩えるのは、異様な比喩であり、読むものに違和感を与える。ここで一種の異化が行われていると考えることができよう。ここで「狂人」はカニバリズムを行っている人を自らが食べようとするの

である。それは自分自身が行う食人である。このことに対する「狂人」の嫌悪感が現実への違和感となり、嘔吐するのである。この部分は、作品の後半に現れる自分も人間を食ったことがあるかもしれないという考えの伏線ともなる。

文例③では、進化論の観点を「狂人」の言葉に組み込んでいる。この部分は、魯迅の比喩の使い方として重要と言えよう。「狂人」の主張は一種の進化論である。「狂人」の進化論では、努力をすれば進化し、よくなろうと努力しなければ進化しない。「狂人」にとって、人間の進化における最高段階は、食人をやめた「本当の人間」である。

魯迅に限らず、当時の多くの知識人が若い頃、進化論の影響を大きく受けたことは、よく知られている。魯迅は、日本留学中の 1907 年に、「人の歴史」という文章を書き、月刊誌『河南』第 1 号に発表した。これは、ヨーロッパにおける生物進化論の概要を、中国に紹介した初期の重要な論文とされている。やがて、適者生存、自然淘汰等のダーウィンの理論は、生物学界だけでなく、人間の生き方や民族の将来といった、思想や政治の領域における理論として理解された。進化論の考えは魯迅思想の原点とも言える。瞿秋白は、のちの魯迅研究に大きな影響を与えた『魯迅雑感選集』序言で「魯迅は進化論から階級論へと進み、紳士階級の反抗児・二君に仕える者から、無産階級と労働大衆の真の友人、そして戦士へと進化して行った」と述べている⁴⁴⁾。

魯迅はほかの小説においても、比喩文に「進化論」にまつわる観点を入れている。例えば、小説「傷逝」(1925 年)において、「ハックスリーが『宇宙における人類の位置』を確定したように、ここにおける私の位置は犬と鶏の間にすぎないことを自覚した」という文がある。ハックスリーが 1863 年に発表した『自然における人間の位置』において、人間の起源についての考えを明示した。魯迅は 1898 年に、南京江南陸師学堂附属鉱務鉄道学堂に入学し、近代科学やドイツ語の授業を受けた以外に、ハックスリーの作品を読んで、進化論的な発想の基礎を作ったと言える。しかし、「傷逝」において、主人公涓生は同棲生活が貧しいため、食べ物を先に犬にあげてから、自分が食べる。そして、自分が食べ残したものを、鶏にあげるという内容がある。進化論において、人類は生物進化の頂点に立つことに対して、「傷逝」において、主人公は自分の位置が鶏の上、犬の下にあると自覚して、自分が地位の低さを強調した。また、主人公が科学的な観点を借りて、同棲生活における自分の状況を分析することは、現実に対して一種の失望の感情を抱えたと考えられる。

2-1-3. 似的、一般

④ 他便變了臉，鐵一般青⁴⁵⁾。

かれはサッと顔色を変えた。血の気のまったくない顔だ。(鉄のように青くなった)。

⑤獅子似的凶心，兔子的怯弱，狐狸的狡猾……⁴⁶⁾

獅子のような凶暴さ、兔の臆病、狐狸の狡猾……

文例④の「鉄のように青い」の表現は、小説前半に何度も現れる「鉄青」という言葉と同じ意味である。「鉄青」とは「人の顔色が黒くなった、極度に怒っている状態」という意味である。また、中国語で「青面獠牙」という成語があり、歯をむき出した凶悪な顔つきの意味であるが、比喩として（鬼神・人間の）面相が凶悪であったり、形相がすさまじいという意味を表している。

ここで、注目したいのは、文例⑤である。文例⑤の「獅子似的凶心」は「似的（のような）」を使用した直喩で、後半「兔子的怯弱，狐狸的狡猾」は隠喩である。「似的」には、「喩詞 A + 似的 + 被喩詞 B」（A のような B）、或いは「喩詞 A + 似的 + （形容詞、動詞等の述語 B）」（A のように、B）という二つの用法がある。例えば、魯迅の小説では以下のような例がある。

(1) 「喩詞 A + 似的 + （形容詞、動詞等の述語 B）」（A のように、B）文型

他的思想仿佛旋风似的在脑里一回旋（《阿 Q 正伝》）

旋風のように思考が頭をかけめぐった。（「阿 Q 正伝」竹内好訳 第 152 頁）

他说着，狮子似的赶快走进那房里去。（《白光》）

（彼は）そうつぶやいて獅子のようにすばやく部屋へととび込んだ。（「白光」竹内好訳 第 170 頁）

以上の二例において、「似的」の後ろは動詞文である。

(2) 「喩詞 A + 似的 + 被喩詞 B」（A のような B）文型

他惘惘的向左右看，全跟着蚂蚁似的人，而在无意中，却在路旁的人丛中发现了一个吴妈。（《阿 Q 正伝》）

（阿 Q）悲しそうな眼を左右に向けて、ぞろぞろ蟻のようについてくる群衆を眺めた。思いがけず路傍の群衆にまじって、吳媽の姿があった。（「阿 Q 正伝」竹内好訳 第 152 頁）

他看见一地月光，仿佛铺满了无缝的白纱，玉盘似的月亮现在白云间，看不出一点缺。（《肥皂》）

地上は一面に月光を浴びて、縫い目のない白紗を敷きつめたよう、空には白い雲間に玉盆のような月がかかり、一点の欠けもなかった。（「石鹸」竹内好訳 第 267 頁）

以上の二例において、「似的」の後ろは名詞である。「似的」の前の名詞は喩詞で、後ろの名詞は被喩詞である。つまり、日本語に訳すと、「A + のような + B」という文型になる。

しかし、前文で挙げた「獅子似的凶心」（ライオンのような凶暴）において、「凶心」は「獅子」に属しているため、両者は「喩詞」と「被喩詞」の関係には当たらず、不完全な直喩になっている。後半の隠喩の部分「兔子的怯弱，狐狸的狡猾」（ウサギのようなびくびく、狐のようなずる賢く）において、「怯弱」と「狡猾」は中国語では両方とも形容詞なので、本来的には「～

的(の)」の後ろに接続することはできない。このように、文例⑤の直喩と隠喩の使い方は、極めてまれな例である。「的」と「似的」を逆にして、「獅子的凶心、兔子似的怯弱、狐狸似的狡猾」とすれば、正しい比喻表現になる。このような誤表現がなぜなされているかは不明であるが、「狂人」の内面の表現としてみれば、その混乱した状態を表すために、作者が意図的に誤った言い方をさせたとも考えられる。

次に、隠喩について考えてみよう。

2-2. 隠喩の実体化

「狂人日記」において、語り手が「狂気」に陥ってゆく過程は比喻表現の機能と深く関わっている。隠喩表現においては、喩詞と被喩詞が「～のような」という比喻指標を持たず直接的に結び付けられる。「狂人日記」においては、「私」の意識の中で、想像・不安が現実へ転化し、「私」はついに「狂人」となるのであるが、その過程は「私」の表象において、隠喩として用いられた表現が、語り手である「私」の思考の中で実体化してゆくことと平行している。このようにして、「狂人日記」においては、「私」の言説の中での隠喩使用が、想像から現実へ移行する転換点となっていると言えよう。

「狂人日記」(三)に、

⑥你看那女人「咬你幾口」的話，和一夥青面獠牙人的笑，和前天佃戶的話，明明是暗號。我看出他話中全是毒，笑中全是刀。他們的牙齒，全是白厲厲的排着，這就是吃人的家伙。

あの女が「おまえさんに食らいついてやる」と言ったのと、あの青い顔、歯をむき出した連中が笑ったのと、こないだの小作人がしゃべったことは、てっきり暗号なのだ。そうだ、わかった、やつらのいうことは、みんな毒だ、笑には刃が隠されているのだ。やつらの歯はみんな白くびかびかだ。あれは人間を食う道具だ。

という文がある。女の「おまえさんに食らいついてやる」という言葉は怒りの隠喩であり、「青面獠牙」は成語であり、獐猛そうな顔を意味する隠喩であるが、「獠牙」は文字通りでは「むき出した歯」の意味である。この文字通りの意味が、「狂人」の心の中で悪人の心肝を食べたという小作人の話と結びつき、彼らの話がすべて毒であり、彼らの笑いがすべて刀であるという隠喩が殺人へと実体化し、また、彼らのむき出した歯は食人の道具であるという形で実体化してゆく。

また、日記本文において、他に成語も使用されている。

⑦「食肉寝皮」(肉を食し皮に寝る)と

⑧「易子而食」(子を易^かえて食す)

という成語も引用されているが、これは『左伝』に典拠を持ち、元來食人を意味していた言葉であるが、現在では強い憎しみを表す比喩（「食肉寝皮」）や、悲惨な生活を現す比喩（「易子而食」）として使われている。それを、「狂人」は字義通り「食人」の意味に捉えているのである。隠喩として用いられている成語を文字通りの意味に取ることによって、成語が実体化し、歴史的な事実として意識されてゆくのである。

このように「狂人日記」では、隠喩表現であるものが事実としてとらえられてゆく過程が、狂気になる過程と重なる。ここに、この小説における比喩表現の使用の独自性があると考えられる。

3. おわりに

今まで、「狂人日記」について、日記本文を「狂人」の内面の表現として考えてきたが、日記の中で「狂人」は「食人」を文字通りのカンニバリズムとして捉えており、中国旧社会の非人間性の象徴と考えているわけではない。それを象徴として考えるのは、読者がこの小説を旧社会への批判として読む場合である。この作品及びそこに現れるイメージなどを社会批判的比喩としてとらえる分析が、第2レベルの比喩表現分析である。それは「狂人」の考えではなく、魯迅自身の考えである。

「狂人日記」は中国近代文学の幕開けを告げた小説である。魯迅自身、『狂人日記』意在暴露家族制度和礼教的弊害（家族制度と礼教の弊害を暴露する）⁴⁷⁾と創作意図を明らかにしているが、この小説はその方向に沿って読まれてきた。確かに、「狂人日記」において、魯迅が「食人」というテーマを巡り、「狂人」というイメージを通して、旧社会を鋭く批判をした内容、及び口語文の「文体」は、当時の青年に大きな影響を与えた。

しかし、日記特有の一人称の独白体は、第一義的には、主人公の内面の表出に関わっている。狂人は最初周囲の視線に不安を感じ始め、次第に自分も食べられてしまう可能性があると考え始める。第三節末では、カンニバリズムを儒教伝統と結びつけるようになる。しかし、「狂人」の対社会認識は食人伝統の次元に止まり、「家族制度と礼教の弊害」を考えるとところまでは及んでいない。それは、魯迅がこの小説に込めた意図であって、この小説を「家族制度と礼教の弊害」のアレゴリーとして読む場合にしか、そのような解釈は生じないのである。

本論は、主に修辞学における比喩表現の角度から、「狂人日記」の文体について分析を行った。日記体の本文は、魯迅が創始した文体であり、文学革命において、胡適らの古語を完全に否定する白話一辺倒の文体とは異なる。魯迅はこの文体を「狂人」の内面の表出のための文体として創出した。「狂人日記」で日記という体裁の「私」物語を書いた魯迅は、その後も「私」を語り手とする小説を数多く残している。「孔乙己」、「明天」、「一件小事」、「頭髮的故事」、「故郷」、

「阿 Q 正伝」、「兎和猫」、「鴨の喜劇」、「村芝居」、「祝福」、「酒楼にて」、「孤独者」、「傷逝」であるが、これらは小説集『呐喊』と『彷徨』に収められている。魯迅は「私」を語り手とする他の小説においては、「狂人日記」の文体を用いて書いてゆくわけではない。それぞれの「私」にふさわしい文体が創出されてゆくのである。

隠喩によって実体化する過程は、「狂人日記」における特有の比喩の使い方である。一方、方言の使用については、別の小説にも方言の言い回しが使用されているため、それは魯迅が文学革命のために作り出した、魯迅独自の文体となると言えよう。

<注>

- 1) 駒田信二「中国の『小説』概念」『対の思想—中国文学と日本文学』 勁草書房 1987 年 319 頁。
- 2) 胡適「文学改良芻議」は最初 1917 年 1 月に『新青年』第 2 巻第 5 号に発表された。本稿は『中国現代文学選集 3 五・四文学革命集』1963 年 増田渉 平凡社 287~305 頁から引用した。
- 3) 陳独秀「文学革命論」は最初 1917 年 2 月、『新青年』第 2 巻第 6 号に発表された。本稿は『中国現代文学選集 3 五・四文学革命集』1963 年 増田渉 平凡社 309~314 頁から引用した。
- 4) 周作人「人の文学」最初は 1918 年 12 月に、『新青年』第 5 巻第 6 号に発表された。本稿は『中国現代文学選集 3 五・四文学革命集』1963 年 増田渉 平凡社 317~327 頁から引用した。
- 5) 魯迅「自序」『自選集』(1932 年)『魯迅全集』(2005 年)第 4 巻 468 頁 人民文学出版社。
- 6) 魯迅「我怎么做起小説来」は最初 1933 年 6 月に上海天馬書店の『創作的經驗』に発表された。本稿は『魯迅全集』(2005 年人民文学出版社)第 4 巻 526 頁から引用した。
- 7) 同前注。
- 8) 増田渉「文学革命の推進者」『中国文学史研究』岩波書店 1967 年 59~60 頁。
- 9) 丸山昇 伊藤虎丸 新村徹(1985 年) 『中国現代文学事典』東京堂出版 237 頁。
- 10) <随感録五十七>—「熱風」『魯迅全集』(2005 年)第 4 巻 人民文学出版社 366 頁。
- 11) 「魯迅の文章」『中国語学事典』江南書院 1985 年では三つの時期に分ける。本稿は、川本栄三郎「魯迅の文章の変遷と変位」を参照した。
- 12) 川本栄三郎「魯迅の文章の変遷と変位」『歴史と文化』岩手大学人文社会科学部 1981 年 222~234 頁
- 13) 同注 2。
- 14) <自選集自序>—「南腔北調集」最初は 1933 年に上海天馬書店の『魯迅自選集』に発表された。本稿は『魯迅全集』(2005 年、人民文学出版社)第 4 巻 468 頁から引用した。
- 15) 『魯迅全集』(2005 年、人民文学出版社)第 6 巻 238 頁から引用し、字体は繁体字に切り替えた。
- 16) 『魯迅全集』第 8 巻 人民文学出版社 2005 年 273 頁。
- 17) 『魯迅全集』第 1 巻 人民文学出版社 2005 年 441 頁。
- 18) 竹内好 『魯迅文集』第 1 巻 筑摩書房 1978 年 3 頁~11 頁。
- 19) 『魯迅全集』第 6 巻 人民文学出版社 2005 年 238 頁。
- 20) 竹内好「魯迅」(1919 年世界評論社版)。本稿は猪股庄八(1964 年)「魯迅伝覚書：<狂人日記>発表(一九一八)から女師大事件(一九二五)まで」『北海道大學文學部紀要』第 140 頁から引用した。
- 21) 同注 5。
- 22) 魯迅「我怎么做起小説来」『南腔北調集』『魯迅全集』第 4 巻 人民文学出版社 2005 年 526 頁。
- 23) 竹内好訳「どうして私は小説をかくようになったか」『魯迅文集』第 5 巻 筑摩書房 1978 年 96 頁。
- 24) 魯迅「关于翻译的通信(並 J.K. 来信)的回信」『二心集』『魯迅全集』第 4 巻 人民文学出版社 2005 年 391 頁。
- 25) 「翻訳について通信」『二心集』『魯迅全集』学習研究社 1984 年。
- 26) 中里見敬「魯迅『傷逝』に至る回想形式の軌跡—獨白と自由間接話法を中心に—」『日本中国學會報』第 46 集 日本中国學會 1994 年。
- 平井博「叙法から見た魯迅の一人称小説—唐代伝奇、晚清小説と対照しつつ—」『人文学報』273 号 東京都立大学人文学部 1996 年。
- 千野拓政「文学に近代を感じるとき 魯迅『『狂人』日記』と「語り」のリアリティー」『接続』第 1 号 ひつじ書房。
- 27) 吉川幸次郎「中国小説の地位」『吉川幸次郎全集』第 1 巻 筑摩書房 1968 年 11 月 201~210 頁。
- 28) 同上 第 204 頁。

- 29) 新島淳良『魯迅を読む』晶文社 1979年 40～41頁。
- 30) 曾建生 「解説魯迅小説応有的几种言語觀—以『「狂人」日記』為例』『語文学刊(高教版)』第5期 2005年 56頁。
- 31) 魯迅「「狂人」日記」『新青年』4卷5号 1918年5月 488頁。
- 32) これは吳方言の肯定形と言えるが、朱德熙はこの文を宋元白話と考えている(曾建生の論文による)。この考えは一理があるが、本論ではこの文を方言と考える。
- 33) 魯迅「「狂人」日記」『新青年』4卷5号 1918年5月 490頁。
- 34) 大原信一「『大衆語』論争と共通語の問題」『人文学』同志社大学人文学会 1964年。
- 35) 魯迅「門外文談・且介亭雜文」『魯迅全集』第6卷人民文学出版社 2005年 100頁。
- 36) 「答曹聚仁先生信」最初 1934年8月に上海『社会月報』第1卷第3期に発表された。本稿は『魯迅全集』(2005年人民文学出版社)第6卷78頁から引用した。
- 37) 同注32。
- 38) この部分は大原信一 「『大衆語』論争と共通語の問題」という論文を参照した。
- 39) 魯迅「「狂人」日記」『新青年』4卷5号 1918年5月 485頁。
- 40) 本稿における文例の日本語訳は竹内好訳『魯迅文集』第1卷 筑摩書房 1978年から引用したものである。
- 41) 凌蒙初「塩官邑老魔魅色 會骸山大土誅邪」『初刻拍案驚奇』卷24から引用し、訳文は筆者がつけたのである。明代末期になると、宋代以来の説話・話本のアンソロジーとして馮夢龍が『喻世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』、凌蒙初が『初刻拍案驚奇』、『二刻拍案驚奇』（いずれも全40巻）を編集し、この5書は書名中の文字から「三言二拍」と総称された。
- 42) 魯迅「「狂人」日記」『新青年』4卷5号 1918年5月 486頁。
- 43) 魯迅「「狂人」日記」『新青年』4卷5号 1918年5月 492頁。
- 44) 瞿秋白『魯迅雜感選集』序言『魯迅雜感選集』上海青光書局 1933年7月。
- 45) 魯迅「「狂人」日記」『新青年』4卷5号 1918年5月 489頁。
- 46) 魯迅「「狂人」日記」『新青年』4卷5号 1918年5月 488頁。
- 47) 魯迅「小説二集序」『中国新文学大系』第4卷 香港文学研究社 1918年 1476頁。

主指導教員（佐々木充教授）、副指導教員（橋谷英子教授・猪俣賢司准教授）